

## 大峰山遭難(1975年夏)

高校生4人が沢登りに出かけ道に迷う。2日目から雷雨の影響で身動きが取れない。8日目に奇跡的に救助されたが、マスコミからのバッシングや救助費用約400万円の請求があった。



## 解説

高校生4人が2泊3日の予定で沢登りの計画。リーダーは沢登りの経験があったがあとの3人は初心者。1日目に食料の大半を食べた。2日目に雷雨に見舞われ、道に迷った。3日目空腹から幻覚や幻聴が現れる。4日目リーダーは高熱に見舞われる。5日目完全に食料が底をついた。目印に黄色のポンチョを滝につるした。6日目突然の雷雨が空腹の4人を襲い体力を奪った。7日目ラジオからは「自分たちの生存の可能性は低い」という内容が流れる。8日目ラジオから「搜索を打ち切る」という内容が流れたため、生徒手帳に遺書を書き残す。しかし、偶然目印の黄色のポンチョを搜索隊が発見し救助に至った。

救助後は、マスコミからの追求、遭難費用の約400万円の請求、無期停学、この事故をきっかけにすべての部活を対象に、夏の対外試合を全て自粛。本当に、申し訳なくてつらかった。と遭難した高校生のリーダーは語った。

時代もだいぶ昔の話だが、リーダーは沢登り経験もあり、慢心があったと振り替えられている。「慢心」私も気を付けたい。